

体験、人々の被害者体験をもう一度意識のなかで、繰り返して追体験したのだろう」と資料によって体験を想起している(小田 2008:70)。このような加害者(空襲における鳥瞰図)の視点は、地上(虫取図)の体験を想起させる資料であった。地上の虫取図的な位置から書かれた空襲体験は、兵器で攻撃する側の鳥瞰図的な視点によって、空襲の記録の必要性が問われてきたのである。

援護法立法化を求める全傷連は、空襲展などの会場で、強硬な活動を続けてきたがゆえに、空襲記録運動からの独立を余儀なくされた。しかし、空襲記録運動の中には、全傷連を引きはがすことの運動自体の弱さを指摘する声もあった(織田 1973:46-7)。空襲記録運動は、戦災傷害者たちの体験も記録の対象としてきた。横浜の空襲を記録する会の今井清一は、障害者手帳から「戦災のため」という文言が削除される戦後体験に対して、「障害ということは非常に苦しいし、おもてに顔を出したくないけれど、国のための障害だということを誇りにし、それに支えられてきたという側面」があったと指摘する(小野 1985:264-65)。空襲体験者と戦災傷害者は、空襲体験を共有しながら、議論を生み出す力学は記録と立法化でしばしば相違していた。そこには空襲記録運動と戦災援護法立法化との距離が見いだされることも少なくなかった。そのことが逆に議論の活性化を促すこともあった。

空襲・戦災を記録する会(全国連絡会議)は、1971年から始まった日本各地の空襲記録運動が年に一度一堂に会する大会である。今井清一は、空襲・戦災を記録する会を年に一度集まって、1年の運動と実情を学びながら、お酒を呑んで苦労や喜びを話し合う「ゆるやかな会議」と評している(今井 2000:6)。しかし、大会開催には、開催地の団体の負担も大きかった。空襲記録運動は、幾度となく運動の終わりが示唆されてきた。空襲・戦災を記録する会の議論する磁場は、日本各地の空襲記録運動の団体だけではなく、広く空襲研究として門戸を開くことで、事務局の設立や会報の刊行などにつながっていった。「ゆるやかな会議」としての性質を持ちながら、内外資料の調査・研究を通して空襲の包括的な理解と普及をはかることが続けられているのである。

おわりに：今後の課題

空襲記録運動の体験記と米軍資料の記録は、各地の団体や他の運動にも波及していく。運動は、目的を同一にしながらも空襲記録運動は、必ずしも「一枚岩」ではなかった。戦災誌・体験記の刊行や慰霊碑の建立、慰霊祭の開催、資料館の開設など、どこも同じようにできたわけではない。空襲の犠牲者数や罹災者数、罹災面積、焼失率など都市ごとに異なる。空襲記録運動は、東京や横浜、大阪などの都市から始まり、中小都市へとアメリカの爆撃の思想のように広がっていった。この空襲の記録をめぐる運動の各地のずれとディスコミュニケーションがあったといえるだろう。空襲記録運動は、ずれやねじれを含みながら「空襲を記録する」ことに収束していたのである。

今後の課題は、より体系的に空襲記録運動を描き出すことである。ドイツの W.G.ゼーバルトは、戦後ドイツの小説の中でさえも空襲が書かれてこなかったのではないかと指摘した。戦後の日本における空襲記録運動は、なぜ空襲を記録するのだろうか。それが社会とどのように関係しているのかを今後研究で明らかにしていきたい。

参考文献◆『東京大空襲・戦災誌』編集委員会,1973『東京大空襲・戦災誌 第1巻』東京空襲を記録する会.◆小田実,2008『難死の思想』岩波書店.◆早乙女勝元,1980,「総括 記録運動の更なる前進を」『那覇市史だより 第16・17・18号合併特別号 今、平和のために 戦災・空襲を記録する会全国連絡会議第10回記念・那覇大会の報告書』那覇企画部市史編纂室,52.◆織田三乗,1973,「『名古屋大空襲展』に見るジャーナリズムの本質」『マスコミ市民 10月号』(75),42-47.◆小野静枝,1985,『その日を生きて 空襲による障害者の記録』大月書店.◆今井清一, 2000,『空襲と戦災を記録する会』30年の歩み』『空襲・戦災を記録する会第30回全国連絡会議神戸大会記録集』神戸空襲を記録する会,6-9.◆Sebald.W.G.,2001,*Luftkrieg und Literatur*, Hanser,=2008(鈴木仁子訳)『空襲と文学』白水社.